



再全箱手玉執首

167
176

4795

091693-000-1

特10-404

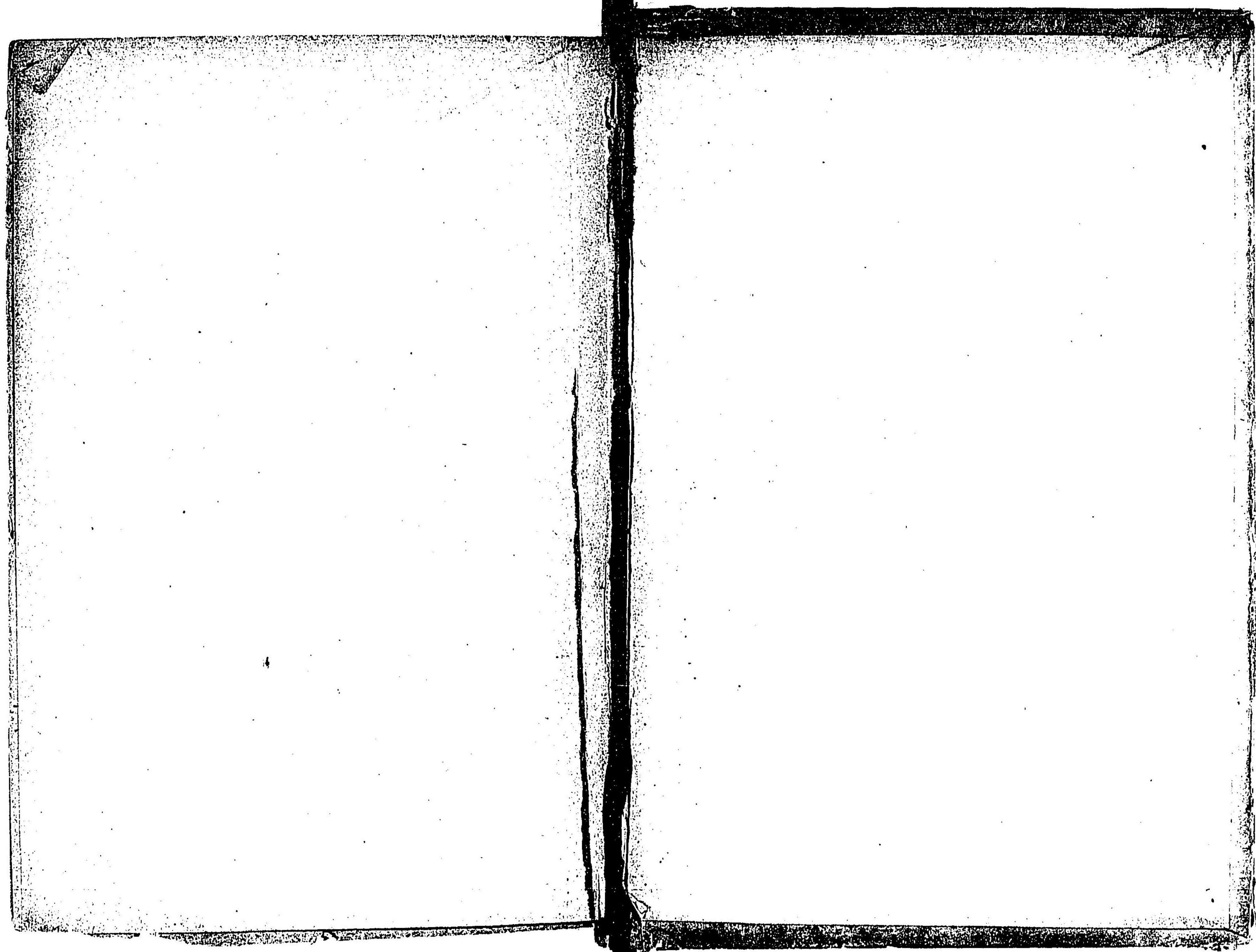
滑稽玉手箱

瘦々亭 骨皮道人/編

M23

DBO-0155





滑稽玉手箱の序

骨皮道人の友に出額助なる者あり一日握り翠玉としてノッ

り来ッて曰くオイ道人此小春時の陽氣なるに破れ机に向ッて凡鎗

然たるは想ふに木景氣の飛ッ尻を食ひたるか將九米の高價のに贈

玉と奪はれぬるか何だ其れ此の如く腑拔然頓痴奇乎たるや語未だ

塵らび道人勃然として曰くオット皆まで宣ふな君は全体盲目同様

の人間より恐れ多くも道人に向ッて語を交へんと欲せば先づ机上

の原稿を見て然る後にとべと決して乞食の了簡を以て大名の腹中

を窺ふ勿れ出額助曰くイヨ一此奴ア素敵な大風呂敷だドレ一其





原稿を見せ給へど將に掠奪ツて之を見んとぞ道人ヒタリとおこし
て曰くドツコイ是ハ玉手箱なり慢に開くべからば若一之を開ひて
見んと欲せば例はソレ○だく

明治廿三年第十一月

瘦く亭骨皮道人 識

笑滑稽玉手箱目錄

- 娛目軍談
- 新發明の傳授
- 茶番狂言の筋書
- 魚盡しの手紙
- しようぎと指す秘傳
- 東京片言笑解
- 酔狂同志滑稽討論の序
- 出放匙阿房多羅經
- 新愈の詩
- 珍粉漢の兼言
- 詞の同じふして文字の違ふ物

- 尻砲笑話
- 五十音のしら附け狂句
- いろは頭づけ都々一
- 月日誤用見
- 古今専名物品鑑
- 短篇小説土用保誌
- 狂詩
- 論語摘句當世見立
- 某雜誌の發刊と祝す
- 一寸耻歌記
- 狂句會席上の張出し

- 智恵野振作初めて女郎買に行
と送るの序
- 智恵野振作の答書
- 狂歌
- 吉原の不景氣と詠す
- 數へ歌つづくつ盡しの替歌
- 某少年の放蕩と戒む

笑 滑稽玉手箱目錄終

持10
402

笑 滑稽玉手箱

瘦々亭骨皮道人 變輯

○ 娯目軍談
 頃は何時なれり虚言八百年の大昔し質の流れの六ヶ月雷ゴロ
 地震は夕云は巴に降り頻る炎暑赫々の花盛りアシア洲は英吉
 利の國の都府と距る五里霧中の片なる北海道の小田原の驛
 前後川の水上に富士の山と狭さみ大法螺と吹き無鐵砲と打ち鳴して
 東西南北天地乾坤に陣所と構へ八大地獄の阿彌陀如來と極樂淨土の
 閻魔大王がヒユードロくドタバタく本當に想なら濟ないねへ
 フくへツタラへラくへと犬も食ない夫婦喧嘩とおツ始めたり此
 時先陣の大將新田肥前守正成の出立と見てあれば金の鯨と分福茶
 釜と頭の腦天に押戴さ儘ヨ三斗笠と脊中の脊中にせかひ舶來の長靴

と兩足にはさしめ勘平の猪打鉄砲と小脇にのこひこみ乍ら木魚の化
物然たる胴魔聲とはり上て大音に迂鳴けるはヤア〜遠き物は遠眼
鏡と以て見常とつけ近き物は虫眼鏡と以て之と見よ我こそは正意痴
位裾逸蕩薄借稻荷大明神第一世十ボレオンの忘れがたみ源の與市兵
衛楠判官頼朝の親類武藏坊辨慶鎌足の家來播州赤穂の城主皿屋敷お
菊の化物とは即ち我が事なり間ぢりく寄て勝負と決せよと襟髪とつ
て引よすれば歳は十六やう我子の年ばへ南無妙陀佛法蓮華經とサア
ベル抜て刺さんとす此時おそし彼のとき早し父母のめぐみも深きこ
ろわ寺と詠歌と唄ふて來るゝる角力取これなん梅川忠兵衛の親父に
て和藤内忠勝なれば流石の大岡由良の助もハットばおりに驚ろきて
静御前楊貴妃お初もる共に親の敵さふもひ知れ目指すは羽柴只一人
と竹槍の天秤棒と振りまわし丁々ハツ矢てう八矢上段下段虚々實々
十八番の無敵流にて戦ひしるを稼ぐに追付く貧棒なければ覺へず知

らすタナ〜と後邊に引て駈出し一目散に逃去したり是より輕隨院
の子分とたのみ再び川中嶋吉良の屋敷に亂入し唐琴屋丹次郎阿波十
郎兵衛討死とする一席は明晩の前席に申し述ない事に致しませう

○新發明の傳授

●一個の團子と以て鯉と澤山に捕る傳
一個の團子と以て澤山の鯉と捕るには先づ薄き白硝子にて小さき吸
血器やうの物と作りこれに一ツの團子と堅く詰こみ又細き麻糸と切
ぬやうに長く手堅くつけて之と鯉の澤山居る處へ投げ込めくなり左
する時は一尾の鯉が來て是は必た旨い餌にあり附たと喜んでパツリ
と呑こむ然れども右の如くガラスの中に詰こみの團子なれば腹に道
入ても消化せず其儘尻の穴あらプツリと出る其處でまた其尻あら出
たのと外の鯉は知らぬゆる又パツリと呑こむ斯の如く口あら呑込で

は尻へ出し口をら香込で尻をら出たのと其儘に氣長く打捨おきて
モウ宜のらうと思ふ頃彼の麻糸と引あぐる時は珠數の如くになりて
澤山の鯉が捕れること請合なり

●二錢以上の郵便と一錢にて用と辨する傳

例へば甲より乙に送る封書に二錢の郵券と張べきと故意と何にも張
らずに郵便函へ投り込み夫より一錢の葉書と一枚買て其葉書へ只今
貴家へ一封の書状と差出し候處ツイ誤つて切手と張らずに郵便函へ
投入致し候間右書到着の上は御迷惑ながら制規の先拂ひ税御拂ひ置
き下され度此段取あへず御依頼申し上候餘は拜顔に讓る云々と書て
遣ば先方の人は是は正直な人だと思ひ心宜く先拂ひの税と出して呉
るゆる縦ひ四錢六錢の郵便物でも只の一錢と散財すれば用が辨する
事請合なり

○聲と出さずに人と呼ぶ傳

聲と出さずに人と呼ぶには例へば權兵衛に用のある時は權兵衛の目
に見へる處へ行て右の手にて左の手にて自分の顔の傍へあげて
お出くの手招きとするなり然すれば權兵衛でも太郎兵衛でも直に
傍へ來る事請合殊に是は大勢の中にて其中の一人と呼出し内証話し
とする時などは至極調法の秘傳なり

○茶番狂言の筋書

本舞臺一面金満家臺所の体よき處に大籠と据へ飯と焚つけしさま時
の流行歌にて幕明と此家の下男權助好みの着つけ襦とはづしながら
二重舞臺へ腰とあけ詞「ホ」に月日の立は早いもの不圖した事あらア
ノお三とあらしな中になつたのも指かり數へばられこれ半年不甲斐
ないのは巳の事只一日お三にさへ樂しみも得させず行先きとて家

一軒借てせうして斯してと心におもへど夫もあなはずりて、加へて此病氣いつそ此身がないならば却てお三の身も立つ道理ハテ此處が一思案だ哩と此ところて誂らへの端歌になり次の間より下女お三人目と忍び出來り權助と見て逢たあつたト鳥渡ふり事ありて抱きつく木竹にあらぬ權助はお三の脊中と撫ながら詞如何なる過去の宿縁やら見る影もない權助と斯くまで慕ふそなたの信切死んでも忘れは仕ませぬぞ夫につけても不甲斐ない已にいつまで悪縁と結んで居るもあぢなこと寧ろ逢ない昔しとおもひ私はスツパリ切れるらら和女も何卒何處外へ縁ともとめて此世とば氣樂に送つてたもいのト云へど答へも泣々に幽前に聞ゆる門づけの三味線に合せ聲清く清本の淨溜理になる

今さら云ふも愚痴ながら悟る御身に迷ひしは蓮の淨氣や一寸ばれ淨た心ぢやござんせぬ

お三はやうく涙と拭ひ恨めしさうに權助の顔と守る思ひ入れこゝで竹笛入りの合方になりアレ彼の淨瑠璃は私しの心切る覺悟で初めらら此様な苦勞はわたしやせぬ縦ひ野の末山の奥手鍋さげても諸とも必らず見捨て下さんすなサアさう云ふは尤もだが目的もつけない此わしに付て居るより切る方が却つて和女の爲であらうあまりと云へば道慾なと愛ひのおもひ入れエ、其お言葉が冥途の土産南無阿彌陀佛トお三は剃刀とり出して自害と仕やうとするア、コレ待た早まるまい「イエ」放して殺して下さんせ迎も生ては居られぬこの身今までは云はずに居たなれど取のまやお前の「エ、ろんならアノわしの胤とアイ三月でござんす哩ナアと恥おしがる權助はホツト當惑顔のときドロくになり大釜に仕掛し飯が吹出してブクク蓋と持ち上げ自由くくブクク飯の吹く音權助さつと思ひ入あつて釜に目とつけアラ不思議やナ一聞およぶ文福茶釜はイヤ知らず常に

變りし飯の吹きやう何にもせよ怪しやナアーと云ひつゝ馳せより蓋
取上げハテ飯ならぬチョン(木の頭)吹襟ぢやナアー

○魚盡しの手紙

一疋啓上致し候鯉々御清河豚賀し奉り候鮭其後は御無沙汰致し候段
平目御用捨鯉ねがひ候私し事未だ年魚む事出来兼鏡鯛罷りコノシ
口に至り少々は宜敷候得とも一ト切は醫者よ薬よと大鯛さ致し鯉
ホウボウへ人ト沙魚心配致し候是は近年鯉生れてより初めての難澁
鯉に盡されぬ次第なりしが鯉是致す中大ぬに快方に趣き候間最ハヤ
鯉殘魚貝はある間敷と存じ候櫻鯛の時節にも相成候は、鯉骨も伸申
す可き敷左すれば人力車に打のり飛の魚にて御地へ罷り越申すべく
宜き鯉もゑ鯉々鯉認め御無沙汰の御鮑申しあげ候金魚

○しよらぎと指す秘傳

先づ狹斜と將棋の局面と見倣すに娼妓の駒下駄の往來と見れば茶屋
に客と待ち駒あり籬で間夫に問駒あり大通直くして飛車先の如く野
暮曲つた事は角道に似たり初會の席上の初王子馴染の鬨の入王も色
は金銀にあつて思案になし堅き心も石田と崩れ檣に圍ひ身代も忽ち
に破らる桂馬は誇つて歩の餌となり香車の慮ありなきは己れと誤
まら或ひは飛車王手の義理にあらめられ或ひは後王手の借金に苦し
む手のなき時ははしの歩とつく茶屋の借は期に臨んで二歩とつひ
留主と遣ふといへども遂に逃道と失ひ都々め雪隠づめと成るなり女
郎買と將棋とさすは一手先の見へざるものなるべし予が屁幕將棋の
及ばざる處は段將棋の助言と請ふのみ扱て其の法は客梯子と二段上
る女郎チヨット間夫道と明る藝車と一まいうつ女郎二間めのささへ
逃る開ひて大手と掛る又た一けんおける頭おら銀とうつ女郎不足に
思ひてとらずに脇へよる又金とうつ女郎其處にて死ぬ

○東京片言笑解

東京の俗間に用ゆる言葉の中に何の事やら譯も解らずに言ひ來り又聞ものも何の事やら譯が解らずに其事と會得する一種奇妙の詞あり尤も其の始めは出所正しき印紙つきなりしべけれども彼の禰子も釋子もと云ふと猫も杓子もと誤り或ひは木葉の火と云へるが河虎の尻と變せし如く洒落に洒落の冠と被せ地口に地口の爰とあけしより遂に來歴出所と失ひ迷子の詞無籍の語とはなりたるなり今その一二と記して十千万年の後の滑稽學者に示す

- のんちやうらい。さてれつ。へんてころい。(共に奇妙の意)
- とんびよこりん(調子はづれ)
- がりくもうぢや(俗物無雅)
- おちよつちよら。おべんちやら。(共に)
- ちよろまかす。ごまのそ。(共に紛せるなり)
- がうがにへる(立腹の事)
- おつりさ。おつ。(共に異風の意)

輕薄)

- しやアつく。づらくしり。(鉄面皮と云ふ事)
- のんこ(押強さのたち)
- ひようたくれ。とんちき。(共に)と云ふ)
- あんけらのん(爲す事なく)
- すこたん。へこさ。あぐこ。(くひ違ふ事)
- おたんちん(否なやつ)
- おつこち(情婦情郎)
- おつこちる(落る事)

○醉狂同志滑稽討論の序

- べらばらくせへ(馬鹿くしり)
- ひよつとこ。ひようろくたま。(人と罵る語)
- ぱくつく(飲食する事)
- あまツちよ(女の事)
- ちやん(親父の事)
- おふくる(母親)
- がき(子供)
- やまののみ(女房)
- やどろく(亭主)

骨皮道人の友達に夢遊居士と名乗て世の中ノホ、ンのヤレコノサ
 と夢我夢中に遊んで暮す男あり此ノホ、ン奴子と道人の勉強賤生と
 と比ぶれば先方は鍋炭の如く此方は雪の如く先方は般若の油繪の如
 く此方は業平の寫眞の如く先方は瓢ツ床面の如く此方は丹次郎の如
 くにして迎も比べものにはならずと雖も縁は異なる者味なもので其般
 若と業平瓢ツ床面と丹次郎との違ひあるにも拘はらず仲の宜事と云
 ったら權八と小紫も舌と巻て逃出しか駒と才三も頭と下て降参する
 はどの仲宜にして一合の濁酒も五勺ツ、分て之と飲み一串の團子も
 半串ツ、分てこれと食ふなり豈に亦た奇妙奇手列の譯柄ならずや然
 り而して一日のこと夢遊居士はノツツリと道人の破屋に來りイヤに
 松王と氣取て曰く道人喜べ金儲けの口が發見たはヤいと道人は金儲
 けの一言と聞て急に坐蒲團の上よりコロコロと轉げ落て曰
 く朔日の朝あら金儲けの口があるとは最も目出たし請ふ夢遊怠明神

道人として其片棒と荷はしめよ而して其金儲けの口とは抑く何事
 如何なる事ぞや犬殺しの手傳ひの將た避病院の看病卒の夢遊子曰く
 ノウく最少し氣の利た仕事にて實は某書林より滑稽討論なる著作
 と請負て來りしなり然れども討論と云へば取る直さず相談づくです
 る体の宜い喧嘩なれば迎も僕一人では喧嘩の間が扱て居て面白い取
 り組も出來まいのら是非道人に片棒と荷ふて貰ひ度と道人曰く宜しい
 儲に笑痴した其代り草稿料は山分なりと夫より毎日毎晩瘦ッ保痴た
 幽霊見たやうな男と無苦く肥太た土左衛門見たやうな男とが一脚
 の破れ机に唐獅然たる頭と突合せて一生懸命に坊主筆とチヨコく
 動のし創業の日より凡そ三十三日三十三時三十三秒半時間にして落
 成の功と奏せり依て之と某書肆に送れば書肆は至って正直ものゆゑ
 草稿と右左の引替に約束の通り文久錢と青錢とと取交て三億三万三
 千三百三十三文と大八車に乗てエンサカホいと引來れり扱てこの錢

の顔と見るとイヤ仲の宜の心易いのと云つても慾の爲には敵さ同
 士となるは普通の人情と見へ初めの山分約束は何處へ吹飛で仕舞
 ひ夢遊子は額に尊業筋と出して曰くヤヨ骨皮子金に手と出す事は暫
 らく待ち賜へ全体最初の約束は山分にする約束に違ひは無いけれど
 も君は毎日く欠伸としたり隠罪頑癖とホリく播て居りしのみ
 て碌玉に書す荒方は僕の筆に成し事も草稿料も七分三分に分け僕
 が其七分の方と取ら君は三分の方と取り給へと骨皮道人これと聞
 き亂杭の味噲ッ齒と剝出して曰く是サ夢遊子君は見慣ない錢と見て
 氣でも狂ったの君こそ鼻糞で丸薬と拵へたり居睡りとして居たり
 して碌玉に書す荒方は僕の手に成し事ゆる草稿料の七分三分は道人
 七分の方と取ら君は三分の方で我慢せよト互ひに慾張根性と突張
 て悶着益く甚だし時に書肆は傍らに聞兼て仲裁の役と務めて曰く
 兩君の悶着は双方共に理あつて其白黒と分ち難しと雖も元來この悶

着の元と正せば此草稿料より起りし事なれば一旦これと持歸り他日
 御機嫌の宜い時に再び持來らんとッロく錢車と挽出さんとす夢遊
 骨皮の兩人は互に顔と見合せて云ひ合さねと異口同音に之と止めて
 曰くイヤサ是は些細の内証事御構ひなしに置いて頂戴と果は一同の笑
 ひとなり誥る處は仲直りと何との云つて書肆の主人に一升二十五
 錢の酒と飲れたるは實に近來の大笑ひなりき依て其儘此に記して以
 て序と爲す

○出放題阿房多羅經

木魚の音ボクくく坊主エ、これより相勤めまするは外に無
 ければ天下第一無類とび切りと云ふ道樂坊主の出放題目阿房多羅經
 のお始まりエ、此のお經と聽ときは男のスパコも女の疝氣も足の頭
 痛も横腹の目舞も即坐に治ること屹度請合の出來ないと云ふ極上等

のお経で御坐る皆さん其お積りで御聴聞と成さいますせ其ため口上お左様エヘンポッくくくくくくくくくくくく

エ、一最一ツお負にエ、一、エヘン恐レ一ながら勿体ながら氣まぐれ厄介道楽坊主が申しわけます阿房多羅文句が何が何だと尋ねて見れば腹のら出放題口から出まのせお氣に障らば眞平御免だ(ポッくくく)抑く當節ア文明開化の舶來仕掛で天保時代にや夢にも知らない爺さん婆さん齒ぐきで牛くひ裏店そだちの三文娘も面附ノツペリ尻さへ輕けりや直線權妻黒ぬり車で旦那と合乗り鼻毛のぞへて芝居の相談(ポッくくく)義理や人情は當世野暮だと親子兄弟たとひ伯父でも義理の姉でも仕た物ア遣なひ貸た物ア取たい措た揉だの内証騒ぎも一度は掛合二度目は裁判代官たのんで原告負すやら被告と潰すやら身代限りは覺悟の前だよ旨ひ物ア食徳衛生養生そんな事お掛は(ポッくくく)六歳や七歳のワンパン小僧も馬鹿にやなら

ない小學讀本作文算術稽古とするあら文久の胎では中々不承知(ポッく)トキミとの漢語で挨拶わたたま禿ても親父は閉口おふくる迷惑書生の演説法螺の吹きくら聴衆の退屈切符の買損(ポッくく)拍手打のは響るのぢや無いぞへ喝采(ポッく)ころる厄介者だヨ(ポッく)待合船宿奥の坐敷でチンく鴨鍋三味線まくらが五圓となつても風俗掛りに見られて騒動これは兄だと云ひぬけするとも文句が古いよ和姦と逃げるもコイツもだめだよツマリ拘引旦那の散財新聞にのるやら名譽回復二度目の騒動男女同權生意氣娘が洋語と漢語の片言まぢりて夫婦約束起証誓紙はむのしの洒落だとアルミの指環と遣たり取たり腹がポテレン私生の届とヤミシモ出す(ポッくく)彼方も不景氣こちら不景氣くく百姓も泣面商人も閉口ソコソ附込み高利の金貸五兩一分で月二の切替へ借る事た借たが返濟出來ない貸やの無鉄砲に借る奴ツ無鉄砲無鉄砲に無鉄砲で二進も三進も

算盤が取れない(ボク)一人息子が徴兵適齢おやぢの心配
 代人料ではドッコイ濟ない廢嫡届けと急に出すやら六十以上の老人
 たづねて養子に遣やら死跡相續もはや種ざれ有る事たあつても直段
 が高いぞ石碑ぐらゐぢや親類不承知とあく浮世は儘にならない金持
 とられて貧乏のがれる何だ艱だも御國の爲なら國民の義務だよテッ
 テケくトットコくヤカセく(ボク)今は世界と交
 際するのら便利も便利だが骨折なければ遊んぢや食なひ色々ささく
 智恵と絞って器械の發明うまくべたと安心する中いつの間やら價
 もの澤山賣出し初める晦日元日祭日祝日すこしも休まず新聞刷やら
 新規の趣向で廣告出すのは思ひ附よければ權兵衛も八兵衛も眞似と
 するのらコイツもお廢し夫に引のへ道樂坊主は口と木魚で出鱈さん
 まい浮世と茶にして面白おろしく暮して居れどもコイツばかりは眞
 似が仕度も眞似は出來ない餘り長いとお客が退風尻尾の出ない中ま

づ此邊でおしまひマ一跡はお布施次第マ一(チヤカボ)くくく

○新怠の詩

我はお客敵娼は
 彼の全盛たる者は
 是に従ふもの共は
 鬼神も知らぬ手管でも
 人間わづる五十年
 行や通へや諸共に
 夢中になつて通ふべし

天下無双の別嬪ぞ
 神武以來の淨氣者
 新造鷓母の不人情
 高が知れたる女なり
 榮へたりとも甲斐もなし
 紙幣銀貨と持出して

○ 廓の風と花魁の

其身の爲の梅毒院

維新このた改まる
また世に出る籠の鳥
規則のもとに營業し
行べき時は今なるぞ
資金の續く夫までは
血の出る様な金にてる

○

前と望めば大門ぞ
門に這入ば極樂土
未來の事と聞つるに
我身のなせる働さで
四方に借し金銭ぞ
金と貸者あるまでは

廓規則の今更に
茶屋女郎屋もろ共に
色氣タツアリある者の
若い年頃二度はなし
通へや通へ諸共に
ドシく持て通ふべし

右と左は引手茶屋
極樂界にのぼるのは
極樂界にのぼるのも
儲けし金にあらすして
借金取もなんのその
通へや通へ諸共に

親々類の意見とば

○

彼處や此處に閃くは
四方に彈出す三味線は
格子先には引張られ
振れて焼と起すやら
黄金は積で山と爲し
地獄の沙汰も金次第
通へや通へ諸共に
一生懸命通ふべし

馬耳東風で通ふべし

引手茶屋の看板ぞ
魂ひ天に飛ばあり
引れて樓に登るやら
持てよだれと流すやら
酒は流れて川と爲す
身体の續くそれまでは
家財道具と賣はらひ

今我こゝに捕はるは
戒しむべきは色なりき

○

賊働いた金のため
假令ひ改心するとも

一旦恥と受けし身は
載て世間に残るらん
間拔な奴と笑はれん
一人前になるまでは
夏日冬日たのみあく

名は何時まで新聞に
人と生れた甲斐もなく
馬鹿野郎とを非られん
勉めや勉め若人よ
孜々學校へ通ふべし

○ 珍紛漢の寢言

○ 一痴漢某衙に詣る、繪鞆吏痴漢に問て曰く、汝が實印と持參せしや否や、曰く之と忘れたり、曰く然らば華押と以てするも敢て妨げず、其れ之と書せよ、痴漢之と聞き華押と誤解して顔と爲し、則ち己れが面と描寫して更に問て曰く、尙は痘痕も點すべきや、
○ 老翁某、家に在て米と搗く、或人之に過り謂て曰く、好天氣老爺恙なきや否や、答へて曰く二堅崇りと爲し三蟲除き難く、我身と攻

て將に死なんとぞ、曰く老爺欺むく勿れ現に嬰鏢として米と搗く、何ぞ病ひあらんや、翁怒つて曰く汝が始めより我が病ひ無くして米と搗く知らば何ぞ恙なきや否やと問と要せんや、
○ 甲乙相對して悲と困じ丙これと傍觀す方に死生の機に至り子と推つて未だ敢て下さず時に甲突然に丙の面と打つ、丙色と作て曰く我汝ちと何の怨讐ある曰く汝が助言と爲すと恐る曰く我未だ曾て一言とも發せず、甲曰く汝が未だ害せざるに先だつて攻るのみ己に言と發して後に打も晚ければなり、
○ 一客翁あり隣村の守錢奴と好し、一夜守錢奴客翁の家と訪ふ欣然相迎へ共に客齋の濫興と話す、夜已に闌はに及び守錢奴將に去らんとす、客翁燈石と取て出て送り、カチくと火と出して曰く履物見へるや否や、守錢奴謝して曰く夜中の道は履物と要せずと、跣足にて去る、客翁嘆じて曰く守錢奴の吝吾及はざる遠し、

○二論者あり相互ひに喋々時と移して未だ終らず、一論者忽ち尻と捲つて放屁一發す、他の論者大に怒つて曰く、胡爲ぞ尻と以て應答するや、曰く君の論は是れ屁理屈の謂ひなり、

○漢學先生一日新聞記者列傳と閱す、傍らに一書生あり、曰く方今の新聞記者は悉く皆な博識多才中に就て品行の方正は誰と爲す、先生唱然として嘆じて曰く、斯の人にして此病あり、

○或鮑駘公震に遇て爲す所と知らず、纔に村夫子と變じて陋邑に師たり、校童あり師の教に隨つて論語と讀下して曰く、賢なる哉、村夫子一圓の財一錢の蓄、陋校に在り生は其愛ひに堪ず、夫子其行と改めず賢なる哉、村夫子と、夫子大に怒つて曰く、咄汝、何の寢言そ、我が月給は九圓なり、校童冷笑して曰く、果して然らば猶是れ食ざるの兆なり、

○一書生あり學資と放蕩に盡し、乃ち時計と曲じて焦眉の急と支ふ、因て鍍金の鎖に天保錢と附て以て外觀と粧ふ、一日學友と散策と試み、歸

途學友問て曰く君は時器は今幾時と指點するや、書生遽然答へて曰く正に是れ當る、

○甲乙の二人路の遠近と争ふ、甲曰く浪華は尾張より遠し乙曰く否な尾張は浪華より遠しと、甲乙激論將に腕力に訴へんとす、偶々乞食あり此と過ぎ見るに忍びずして勸解す、甲曰く汝が常に諸國と徘徊すれば必らず其遠近と知らん、請ふ我が爲に之と判せよと爲に若干錢と與ふ乞食謝して曰く尾張が遠

○扈從某御前に侍じ誤つて放屁す、遽に之と掩んと欲し指に唾して鏡のに敷居と摩す、主人笑つて曰く爲す勿れ前聲の如きは復た出さず、
○主人病ひあり、婢煎茶一杯と捧て至る、主人誤認して藥と爲し頭に載いて拜す、婢欣然として曰く、君戯むる、勿れ恐らくは細君の見る有らん

○或人法會と營み菩提寺の僧と招く、此日偶々和尚病に臥し小僧と

して之に代らしむ因て小僧往て讀經し畢れば饗膳前に供はる小僧此膳部と見て不平の色あり曰く人參午房は祖師元好まず精進料理は當世に適せず曰く何曰く何と惡口喋々人として聞に堪ざらしむ主人眼と怒し叱して曰く昔し法然上人は其母日輪の懐に入ると夢みて孕み又日蓮上人の母は劔刀と香と夢みて妊す汝等の如きは何の祥も無くして生る且つ破戒心あり所謂生臭坊主なる者は是れ即ち佛家の罪人なり速に去れ速に去れと小僧畏怖走り去て直ちに自家に致り突然母に問て曰く阿母吾と孕むとき何と香と夢みしや母倉卒に答へて曰く咄面倒なり魚庖丁と香と夢みたりと小僧頭を撫して歎息して曰く呵施主の吾と呼で生臭坊主と謂しも亦た故ある哉

○某島に野と荒す者あり島人怒りに堪ず一夜忍んで待つ夜半に及んで大崎あり來つて頻に蔬菜と食ふ皆曰く入道惡むべしと乃ち斧或ひは鎌等と執て各々之に向ひ忽ちにして六足と斬る入道猶ほ二足あり漸く逃れて嶮崖に至り獨り謂て曰く我惡は小ならずと雖も六足と斬るは實に殘酷なり曾て聞く昔し菅相丞は雷と爲つて怨みと報ゆと我應に鉄槌となつて此の鬱憤と報ゆべしと然るに偶々誤つて深谷に落ち石に觸て頭を割く是に於て歎じて曰く呵遺憾なる哉鉄槌と爲ると得ずして釘板と爲れり

○稱屋圖部六なる者あり無學文盲唯酒と香の藝あるのみ其妻一日謂て曰く此頃惡疫流行我家赤貧加ふるに病ひの來るあらば忽ち飢寒に迫るべし依て妾苦辛して二十錢と蓄へり良人宜しく是と以て某の神社に到り祈禱と請ふべしと圖部六悦んで以爲らく酒料と得たりと乃ち居酒屋に入て一合く又一合充分に酔と盡し日の晩ると待て出づ然れども神符なきと以て窺ひに他家に張所の札と剝し是と懐にして歸る妻問て曰く神慮如何曰く大丈夫是は祈禱札なり妻讀一讀怪んで曰く此は是れ貸家の札なり圖部六即ち案じて曰く空家なれば病ひも

來らざるの理なり、

○遊治郎女郎某と契る約すらく縦令ひ生日と殊にするも必らず同時
 と以て死せんと愛一日より深く情一月より濃なり一夜遊治郎例に
 依て至る女郎問て曰く郎君今夕來る何ぞ遅き恨むべし恨むべし遊治
 郎愁然として曰く我が家財と浪費するを怒り遂に我と追ふ我往に
 家なく歸るに地なし故に寧ろ死せんと欲するのみ女郎驚いて曰く果
 して然るの因て潜然として涙下る遊治郎曰く卿曾て我と約す今その
 約と踐や否や女郎曰く君に誓ふの事妾何ぞ違はんと乃ち手と携へて
 河に至り遊治郎先づ跳て水に入る女郎獨語して曰く諺に枯木に花は
 咲すと云ふ寧ろ歸るに如かずと一遍の念佛と唱へて去る遊治郎固より
 水に熟し体浮んで死する能はず遂に堤に上つと以爲らく生は難し死
 は易し如す一功と樹て以て父に謝するにはと女郎の爲に亦た一遍の
 念佛と唱へて去る林頭と過るに及んで忽ち彼の女郎に出會す兩個相

見て相驚き互ひに曰く一別以來恙なきや否や、

○東隣に鰻と鬻ぐ者あり西隣の主人常に其香いと嗅で飯と食ふ東隣
 の主人意平のならず一日其價と求む西家の主人急に一緡の錢と出し
 之と地に擲つて曰く子其れ此音と聴け、

○醫某曾て某の女と慕ふ會く其病あるに逢ひ醫これと診す父母左
 右に侍し診畢る女父に謂て曰く父請ふ去れと父去る又母に謂て曰く
 母請ふ去れと母亦た去る醫是に於て氣搖々心悸々たり女曰く妾先生
 に依頼する事あり知らず許さるゝや否や醫恍惚として魂飛び垂涎三
 尺膝と進めて其故と問ふ女漸くにして曰く俯して請ふ先生も此より
 去れ、

○不孝者あり人これと諭して曰く父母は一たび死せば縦ひ千万金と
 出すも亦た得べのらず君能く事へて之と誤る勿れと不孝者曰く誠に
 貴命の如きの然れども今日試みに父母と賣らば豈に三文の直打もあ

らんや
 ○一書生頻に基督教と信じ某の宣教師に就て聖書と學ぶ然れども記
 憶力甚だ薄弱にして毎日學ぶ所一の記憶なし已に一年餘と經るも未
 だ一部の書と讀み了る能はず宣教師大に嘆じて曰くア、メン倒な
 る哉宣教や、

○詞の同じふして文字の違ふ物
 ○蜂と鉢 ○天井と天上 ○鯉と鱈 ○商人と證人 ○蜘蛛と雲
 ○花と鼻 ○腹と原 ○錫と鈴 ○鉛と訛 ○鎌と釜 ○槐と櫻
 ○橋と端と箸 ○炭と墨と隅 ○灰と蠅と肺 ○神と紙と髪と上
 ○葉と齒 ○火と日 ○松と待 ○竹と丈 ○海苔と糊 ○調度と
 丁度 ○野紙と桂枝 ○蘭と亂 ○足袋と旅 ○痰と丹 ○石と醫
 師 ○産婆と三羽 ○普通と不通 ○豆と壯健 ○雨と飴 ○狀と
 錠 ○貝と擢 ○庭と二羽 ○急須と窮す ○朝と麻 ○神輿と見

越 ○行李と高利 ○安利と鑑 ○酒と醜 ○針と球 ○嘔吐と大
 戸 ○百合と由利 ○地震と自身 ○下と霜 ○團扇と内輪 ○海
 と膿 ○瘡と笠 ○咳と關 ○二王と香ふ ○土と搥 ○帆と穂
 ○蚤と鑿 ○子宮と至急 ○栗と庫裏 ○善と膳 ○烟管と着せる
 ○字と痔 ○療治と領事 ○梟と袋 ○紙鳶と章魚 ○鶴と蔓 ○
 鳶と飛び ○福と拭 ○水と見ず ○足と芦 ○門と紋 ○葛と屑
 ○五圓と御縁 ○十圓と重縁 ○住寺と十時 ○九時と公事 ○半
 と痘痕 ○壹岐と息 ○呼吸と胡弓 ○琵琶と批把 ○梨と無し
 ○園基と以後 ○鯨と否な ○入梅と露 ○冥加と茗荷 ○陰氣と
 墨汁 ○隠士と印紙 ○今と居間 ○一生と一升 ○衣冠と醫官
 ○廷と寧ろ ○決闘と血統 ○豈にと兄 ○伊丹と痛み ○一丈と
 一條 ○生涯と生害 ○燈籠と登樓と螳螂 ○老少と癆症 ○牢と
 蠟 ○馬場と祖母 ○孔明と高名 ○船頭と煽動 ○伯耆と箒 ○

蓮と蜂巢 ○林と早し ○雪と行き ○目と芽 ○誹諧と灰買 ○
 春と張る ○晝と蛭 ○大事と大字 ○楯と縦 ○旗と畑と機 ○
 河豚と不具 ○白狀と薄情 ○虹と二字 ○産前と三膳 ○二本と
 日本 ○人參と胡蘿蔔 ○刃傷と人情 ○牡丹と卸 ○孔子と格子
 ○肛門と孔門 ○下手と帶 ○豹と電と俵 ○返事と變事 ○龜
 と瓶 ○樂と額 ○橙と代々 ○翌日と朝 ○河童と合羽 ○蚊張
 と櫃 ○期限と機嫌 ○糟と貸す ○加護と籠 ○堅氣と樞 ○實
 体と鉄鞭 ○談しと齒無し ○蛙と歸る ○皮と川 ○鰈と家令と
 家例 ○冬至と湯治 ○動氣と同氣 ○狎と賃 ○父と乳 ○韓信
 と感心 ○支那と品 ○丁子と停止 ○鱒と升 ○孝行と香物 ○
 父子と節 ○普請と不審 ○扶助と婦女 ○府中と不忠 ○獨樂と
 駒 ○專賣と煎杯 ○此等と虎列刺 ○氷と郡 ○書記と暑氣 ○
 紺青と今生 ○銚子と調子 ○秋と飽き ○海士と尼 ○安危と安

氣 ○行燈と安藤 ○相圖と會津 ○安産と暗算 ○養蠶と洋算
 ○歳晚と裁判 ○猿と去 ○庵と鱒 ○鮎と味 ○驚と詐欺 ○妻
 と菜と賽 ○唱歌と商家 ○參議と算木 ○産後と珊瑚 ○急場と
 弓馬 ○馬子と孫 ○皮膚と被布 ○又と股 ○小本と古本 ○娼
 妓と將棋 ○語と碁 ○五經と五經 ○壯士と双紙 ○校正と後世
 ○椿と唾 ○養子と洋紙 ○兄弟と鏡臺 ○黃瓜と窮理 ○鑽物
 と好物 ○瓜と賣 ○暴士と帽子と某氏 ○愚弄と愚老 ○容赦と
 幼者 ○白紙と博士 ○佛參と物産 ○勘定と感情 ○刺客と四角
 ○午前と御膳 ○楊枝と用事 ○拘引と光陰 ○体操に大層 ○
 梧と錐 ○金と鐘 ○下等と加藤 ○將來と性來 ○五角と碁客
 ○近從と禽獸 ○勝負と菖蒲 ○鹿と詩歌 ○發起と發氣 ○簿冊
 と菩薩 ○僕と木 ○杭と悔 ○鏡爐と正氣 ○少將と少く ○兎
 器と狂氣 ○我意と害 ○教師と狂詩 ○子と粉 ○學士と學資

- 町名と長命 ○桃と股 ○藏と鞍 ○鞭と無智 ○乞食と古事記
- 晩と番 ○府會と不快 ○草木と總目 ○瀛車と記者 ○家政
- と加勢 ○釣と餘錢 ○鈎と鍵 ○籠と鴛 ○當分と等分 ○平等
- と廟堂 ○配當と佩刀 ○急速と休息 ○堂と洞 ○仙人と千人
- 雷鳴と雷名 ○交換と高官 ○貴顯と危險 ○紹と櫓 ○木地と
- 雉子 ○鉄道と手傳ふ ○楫 家事 ○俳優と諧友 ○午勞と御坊
- 衰狀と北條 ○篩と古い ○三府と産婦 ○近國と禁獄

○尻砲笑話

人と生れて尻砲を放たざる者はなし人みな之を放つと雖も雪隠に於てするは又は人の居らざる處に於てするは宜し席上に於てし又は人の面前に於てするは宜しおらす出物腫物は處を嫌はずとの古語はあれども花嫁さんの婚禮の席に放ち藝者のお客の前に放つも亦た差支

へなしとせば人間たる者の禮儀作法は是の爲に崩れて三せん焼芋の買食に食傷して味噌と摺りく臺所にブーの一聲と漏する人皆な四噉つ面をせざるはなし故に雪隠の外は決して放つべからず万一放たざるを得ざるの急に臨むも種々以て之を殺すべし猶止むを得ざれば只虚漏の一法あるのみ然りと雖も往々放つべからざる場合に放つて笑ひを招く者あり往昔し徳川氏天下と一統し諸侯總出仕の席に於て如何なる肛門の機會なるの家康公上壇に着坐して一聲ブーと放ちたり諸侯失笑に堪へざれども家康の權威を畏れて強て笑ひ忍び一坐爲に寂然たり流石に當時有名の紀州公は早くこれと察し坐と進めて祝賀して曰く兵衛權既に御家に歸したり敢て奉祝すと尾州公も亦た進んで曰くブー運長久と水戸公も亦た祝して曰く天下泰平(屁)と此に於て諸侯みな一齊に屁くく屁いと是れ人の傳へて尻砲中の一大奇談とする所あり其他は概ね放つて赤面せざる者はなしと

雖も獨り都人の洒哇突乎たる敢て之と意とせざる者あり殊に裏店社
 會にが長したる者の如きは婦女子と雖も亦た往々席と憚ららず年も
 二八の別嬪にて頭には大島田と戴き面には白粉と塗り虫も殺さぬ容
 子と粧ふて焼芋と嚙りなゝらにブーくと放つ者なり去れば狭斜の
 地に入て泥水と飲むものは最も平氣なりと雖も其地に因て自のら其
 有様と異にし芳原は芳原の放風あり品川は品川の放風あり板橋新宿
 も亦た各々其風あり芳原の娼妓偶く誤つて客の前に放ては樓丁喜
 助早く其機に投じ客に陳じて曰く賤奴昨夜より滅法界に酩酊し腹部
 の器械全く狂つて遂に蛙るの仮聲と放つたり敢て謝す花魁請ふ爲め
 にお客様へか詫と頼むと客笑つて曰く亦た是れ一興何る咎めんと直
 ちに懷中と探つて二十錢と投ず喜助頓首再拜尻々々々と尻と天に
 朝して曰く万謝くと満面に喜色と帯て坐と起ち去る花魁も亦た次
 で起ち廊上に喜助と呼んで曰く喜助ぞん今の砲發は全く妾なり宜し

く十錢と割て妾に與ふべしと品川の妓は全く之と反す乃ち鴛鴦袋中
 誤つて虚砲と放つ妓忙はしく夜着に襟と縮めて之と蓋ひ足以て袋と
 振揚して氣と後ろに漏しめんとす客怪み問ふて曰く汝ち何の眞似と
 なすや妓曰く戯れに彼の漁帆の様と寫すのみ曰く否な彼は漁船に非
 ず糞船ならんのみ果して臭氣鼻と衝くと板橋新宿の妓は常に擔糞と
 客とするを以て其風極めて野鄙なり一妓亦た偶く袋中に放つ客鼻
 と撮み大喝嘔鳴て曰くコン畜生お客様の傍とも憚ららずして尻と垂
 るとは嗚呼何ぞ失敬の甚だしきや妓曰く出物と腫物は處と嫌はず然
 るに汝ち大聲と放つて妾の耻と洒さんとするの好し妾も亦た爲す所
 ありと忽ち身と起して客の襟と掴み絞一絞す客苦と叫んで曰く請ふ
 宥せく曰く然らば汝ち決して此事と他言せざるの曰く必らず黙す
 く曰く然らば又一砲と試むへしとブーと一聲放つて曰く嗚呼心地
 宜しくと夫れ娼妓の醜体なる概ね斯の如しと雖も猶これより甚だ

しきものあり、即ち姑の嫁に於る是れなり、姑一日巨砲と嫁の面前に放
つ姑忽ち怒色と粧ふて曰く、尻砲は婦人の最も慎むべき者なり、況んや
姑の面前に放つに於てとや、以後は必らず慎むべしと、嫁は全く冤罪と
蒙ると雖も、後日の復讐と怖れ、謹んで謝して曰く、全く兒の誤りなり、幸
ひに宥恕せよ、然りと雖も、兒曾て聞く尻砲は長壽の兆なり、氣下に漏れ
ば腹従つて調ふ是れ壽と致す所以なり、姑忽ち曰く、果して然らば今の
尻砲は老婆だく

○五十音のしら附狂句

- ア わついか世話と灸すへた禮手紙
- イ 五ッ紋昔し堅氣の保険証
- ウ 嘘の八百統計表で馬鹿尋ね
- エ 閻魔の戸籍同名多し土左衛門

- オ 折るなわれ只見て歸れ廓の梅
- カ 金なくば何のみのれが色男
- キ 金入齒不動産まで食ひ潰し
- ツ 唇の寒さと知らぬ啞の秋
- ケ 下戸一人寝たる姿や柏餅
- コ 小男の智恵舶來のフランドー
- サ 坐食の徒なし立食の開けた世
- シ 鹽花はふらず存娼論の客
- ス 涼み臺又た初まつた星の論
- セ 撰擧のダシに遣はれた堅魚節
- ソ 其れ然り豈に然らんや後家の貞
- タ 短氣でも流石客齋坊笈となげ
- チ 小さくも儲めに虎ぞ應擧の書

○ツ 掴み合ふまでには飲な驚ビール
 ○テ 出来合の塗物馬鹿に添た智恵
 ○ト 燈籠とうしろのら見て内は闇み
 ○ナ 泣面に蜂歳末の非職沙汰
 ○ニ 憎くなし我子の辨護する守り子
 ○ヌ 縫目はあれと翠玉は綻びず
 ○チ 寝惚の書出され鑑定目と摩り
 ○ノ 能辨の博士は虎に添た羽
 ○ハ 花も見ず團子も食ず居候
 ○ヒ ひねくつた文字代言の門に札
 ○フ 附籍とは体裁の宜い居候
 ○ヘ 尻は尻に出て又鼻へ逆戻り
 ○ホ 本石にあらず山出し下女も諾

○マ 學べ人身の財産を智恵の袋
 ○ミ 三日月の弓に矢と射るはとゞぎす
 ○ム 無理な注文魂と入れのへろ
 ○メ 目覺し時計は權妻の敵き役
 ○モ 用るやう種々の功ある咳ばらひ
 ○ヤ 焼餅も程を過れば増す苦味
 ○井 爲政治家の基礎と頼むは仁一字
 ○ユ 行きとゞく保護派出所へ非常線
 ○エ 縁は異なもの閻魔野郎に地藏嫁
 ○ヨ 芳原の梅花は粹の實とむすび
 ○ラ シンブ屋客齋すき通る腹の中
 ○リ 六合の中に三種の神寶
 ○ル 流浪した人はと腹になき濁り

○レ 連帯の義務廻し床共あくび
 ○ロ 論より正午とは空腹へツドーン
 ○ワ 我田へ水引く村會の舊名至
 ○イ 井戸の傍走る子親の氣も汲す
 ○ウ 馬の審査ピールと骨て濫い顔
 ○エ 江戸ッ子の遺風は富士の夏景色
 ○チ 沖繩の娼妓金魚の中に鮎

○いろは頭づけ都々一

○い 家と出る時や別れて出ても郵便彘で逢ふ手紙
 ○ろ 論よりや負るがコレマア御覽証據は羽織に紅の色
 ○は 腹も立まい立せもすまい四海兄弟自主の權
 ○に 憎らしいよと脊中と叩き莞爾笑ふてのぞく顔

○は 惚た同士はこゝろも空にのぼり誥たる輕氣球
 ○へ 返事するさへ猶ほ口籠る況てモシとは呼びにくひ
 ○と とけぬ紛れに切ては見たが後ぢや矢張りつなぐ糸
 ○ち 一寸途中で降こめられて腰とめけたが縁の端
 ○り 愒氣で私しは云ふのぢやないが淨氣するにも程がある
 ○ぬ 主の淨氣と主にも云はずト云つて人にも云ぬ義理
 ○る 流浪するものも今更思やみんな自分の心あら
 ○と 折つて見たりと心の中で思や主ある女郎花
 ○わ 私しばりのりアレ洋犬までが下駄とくわへて留る足
 ○あ 歸り支度の乙鳥にゐへて初會なじみの雁のふみ
 ○よ 他所に巢籠る主とは知らず待夜は長いよ鶴の脛
 ○た 偶にやお早くお歸りなぞ、愒氣離れて粹異見
 ○れ レコが無いもゑ見切たければ振られたお客は嘸や嘸

○そ 夫と云はねとさゝれた猪口に浮ぶ情と汲み交す
 ○つ 露と尾花とそのいさるひの縫れ吹き解く朝あらし
 ○ね ねても覺ても苦勞の夜中にくや戸叩くあの水鶏
 ○な 鳴て暮すも當坐のつとめ末にや身とひく秋の出
 ○ら 樂も苦勞も素より承知斯なりや二人で共のせぎ
 ○む むりや邪見も苦勞だけれと可愛がられりや又苦勞
 ○う 浮氣に跳出し硯の海に身とば投たる粹な蚤
 ○ぬ めつと断たら氣が安ろると云ふは迷はぬ人の事
 ○の 咽と鳴して最來る頃となで、待つ夜の猫火鉢
 ○お 己が羽風に鳴子とならし獨りで氣とむむむら鴉
 ○く 來るゝと思へば又た行く燕なんで氣とむむ上の空
 ○や 山家そだちの山葵も積りや酸味で泣せる三ばいす
 ○ま 迷ふ鳥羽玉戀路のやみと照すランプはなせ出來ぬ

○け けむい仕打の主や巻たばと吞こむ振して口ばあり
 ○ふ 不圖した事らコツツリ稻の穂の字に實り入り飯となる
 ○こ 怖いが序幕で嬉しい濡れ鳩末は目出度夫婦中
 ○ゑ 榮耀榮花に暮さうよりも二人自由の小なべ立
 ○て 手廣く地面とつては居るが店借して居る藤の花
 ○あ 逢ふは別れの種とは知れぬいつも別れに翻す愚痴
 ○さ 酒も豆腐も自由な廓で聞くは果報の時鳥
 ○さ 切はせぬると案じる鼻緒調べて崩へる主の下駄
 ○も 夢の浮世に長らへ居れば五臟病よな事はあり
 ○め 芽と出しや剪とり花咲やはさむホンに不實な花剪刀
 ○み 身に引あてたる繪入の織き余計な苦勞と新聞紙
 ○し 自烈た紛れに引裂文が破れらふれの事はじめ
 ○ゑ 縁と繋ぎの屏風の中は切にさられぬ蝶つがひ

○ひ 廣い世間も束縛されりや啼てあゝす籠の鳥
 ○も もやひ繋ぎし橋間の小船浮た端唄の水調子
 ○せ せけば堰は必アレ憎らしや人と待せるはとゝぎす
 ○す 墨に思ひの戀ぢと籠て薰り洩さぬ状袋

○月日誤用見

○三日ころり ○十日の雨 ○五日の風 ○六日の萱蒲 ○十日の
 菊 ○十日蛭子 ○九日茄子 ○人の噂も七十五日 ○初物と食て
 生延る七十五日 ○千歳飴 ○万年柄杓 ○災禍も三年 ○石の上
 にも三年 ○三日太平記 ○茶腹も一時 ○百日のづら ○百日せ
 き ○寒三十日 ○二十日土用 ○七日のお客 ○二十日草 ○百
 日紅 ○六日せし越 ○三十日請合しらみ紐 ○三日月お仙 ○百
 日の説法 ○面壁九年 ○二日灸 ○合せて百兩百ヶ日 ○二十日

餘りに四十兩 ○千日参り ○君は三夜の三日月様 ○桃栗三年

○柿八年 ○十八がゆ ○十月の小六月 ○蚤の四月 ○蚊の五月
 ○霜枯三月 ○夜蜘蛛の一昨日来い ○千日紅 ○一ト夜ぎけ ○
 苦界十年 ○千日に刈た萱 ○いつも正月 ○二百十日 ○三七日
 の立願 ○十日晴天の相撲 ○二十日ねづみ ○二十日正月 ○十
 夜まゐり ○四万六千日 ○三日坊主 ○前後九三年 ○二百二十
 日 ○万年新造 ○四十二の厄年 ○万年酢 ○鶴めめ千万年 ○
 彌勒十年 ○千松の千年万年 ○三月大根 ○八十八夜 ○九年ぼ
 う ○霜月二十日勝頼様 ○紺屋の明後日 ○三日月の頃より ○
 三日見ぬ間にさくら ○月の八日はお薬師 ○三十日蕎麥 ○三日
 限りの手附金 ○質の流れ六ヶ月 ○三日月まも ○出産の十月
 ○見附られたる百年目

古今專名物品鑑

- 藤八拳
- 布袋竹
- 甚九踊
- 一閑張
- お七掛
- 桃太郎團子
- 利休箸
- お龜蕎麥
- 與四郎象眼
- 糸三番
- みすや針
- 次郎左衛門雛
- 辨慶編
- 觀世水
- 義經袴
- 孟宗竹
- 定家袋
- 宗十郎頭巾
- 幾世餅
- 豆炭頭巾
- 高野豆腐
- ナボレオン襦
- 信立鍔
- 勝山鬘
- 義大夫節
- 大黒傘
- 新内節
- 寶生雲
- 團十郎格子
- 三太郎ふし
- 市松格子
- 業平菱
- 五右衛門風呂
- 源五郎餅
- 金山寺味噌
- 清元银杏
- 澤庵漬
- お六櫛
- 隱元豆
- 惠比壽紙
- おまんが飴
- 小町紅
- 助想燒
- 文七元結
- 春慶ぬり
- 寶藏寺繩
- 兼房染
- 藤九郎鳥

- 建仁寺垣
- 平家がに
- 毘沙門籠甲
- 書生ばとり
- 天王寺のぶ
- 越中ふんせし
- 眞田織
- 三齋羽織
- 織部やき
- 道三湯
- 坊主しやも
- 嘉平次平
- 小笠原編
- 孫太郎むし
- 石川編
- 徳平のうやく
- 與兵衛鮓
- こひさう下駄
- 團平きしやこ
- 大黒煎餅
- 源氏車
- 万作豆
- やつこ鱧

○狂詩

○友人某歸、故郷後寄一詩于道人

其詩曰

爾來無恙否、戀儘御尋申、淺草猶重度、芳原定益、
 頻小生遙痛思、足下少憐人、返事伸頭待、勿々茲、
 奉陳。

○道人次韻答之

別後無音段。低頭說申。登樓吞酒數。投扇擲錢。
顏。藤見連遊妓。芝居誘友人。斯云皆誕也。實際拜
顏陳。

○再用前韻寄友同人二首

每度尊書趣。徒然御察申。暮春花落盡。初夏鳥悲。
類。上野無遊客。隅田絕雅人。東京亦如此。衰狀不
堪陳。

○其二

又和過日韻。樣子御窺申。歸國逗留永。上京相待。
類。傳言付那妓。手紙托郵人。万端委敷譯。其內拜

眉陳。

○某友人聞度々轉居戲賦之寄
足下蝸牛御再來。一年引越凡何回。

若教孟母在今世。正是競爭相手哉。

○題自著滑稽新用文章

聊任所望綴此書。此書元異普通書。
有人若問此書譯。答曰此書狂化書。

○題同滑稽記事論說文

非文非語又非詩。一種寐言供御嗤。
何卒諸君賜高覽。道人幸福不過之。

○自題寫真

頰骨如山鼻似獅。眉爲八字壓彌治。呆返實無色氣姿。

○自陳 二一首

利功馬鹿不分明。乍我身難合點行。法螺吹立口先輕。

○其二

元來拙者一風違。耻與外聞不屁思。夫故借金澤山積。儘三斗笠被縱之。

○變休狂詩八首

妻困切近來且那迷。唯泣計每夜守空閨。娘樣子尤宜薄。化粧不油斷。駟落失行方。

婆始終念佛。唄花歌。餘程妙脊中似駱駝。婢間有美於細君。美且爲夫腹脹歸親里。權十時頃迄貪安眠。不爲用。体裁奧樣然。妓霜枯三月挽茶耳。考工夫暫時爲小指。娼客無金押。却強猶不印。身受迪難望。客敵娼何故去。無迹獨盈槍。不如眠自宅。

○論語摘句當世見立

○亦樂しゝらずや(國會の開設) ○本立て道生ず(憲法の實施) ○四十にして惑はず(樞密院諸公) ○犬馬に至るまで皆能く養ふあり(新華族) ○故きと温ねて新しきと知る(美術會) ○小大之に由る(洋癖家) ○損益する所知るべきなり(統計學) ○其奢らんよりは寧ろ儉せよ(外見)

の盛飾 ○朝に道と聞て夕べに死すとも可なり(壯士の運動) ○罪を天に得て禱る所なし(常事犯の増加) ○其争ひや君子なり(政党の我田へ水引論) ○美と盡し又善と盡せり(宮城) ○大廟に入て事毎に問ふ(新任の大臣) ○禮と盡せば人にて諂ひと爲す(論の愚痴) ○人の過ちや各々其党に於てす(國事犯) ○君子なる哉此の如き人(三條公) ○位なきと思へず立ん所以と思ふ(福澤氏) ○巧笑倩たり美目眇たり(馬骨の變化) ○令尹の政必らず以て新令尹に告ぐ(知事の交代) ○善虎馮河死して悔なき者吾は與せず(決闘條例) ○人と誨て倦ず(小學教師) ○敢て後れたるに非ず馬進まざればなり(政治家の嘆息) ○深淵に臨むが如く海水と履が如し(屁幕演説) ○任重くして道遠し(外國公使) ○民之に由らしむべく之と知らしむべからず(内閣の秘密會) ○秀で實らざる者あり(在野の君子) ○各々其志しと言のみ(政談演説) ○以て難しと爲すべし(廢娼論) ○今の學者は人の爲にす(學士の金儲)

け) ○身と殺して仁と爲す者あり(愛國者) ○遠き慮あり無ければ必らず近き憂ひあり(國會議員の撰舉) ○已ぬる哉(新聞の停止) ○中道にして變ず(デモ雜誌の流行) ○使ひなる哉使ひなる哉(事物取調の爲に洋行) ○其れ猶ほ芽愈の盜のごとき歟(賄賂議員) ○猶ほ己に賢れり(非職官吏) ○前言は之に戯るゝのみ(此見立)

○某雜誌の發刊と祝す

某氏一日セツセと道人の破ら屋に駈込來ッて曰く僕が豫て計畫する所の雜誌何々の世に現はれ出すは將に近きに在らんとす請ふ君得意の筆と揮つて之と祝せよと道人曰くへ、一夫はお目出度事で御坐る畏まりました何のと小理屈と並べてお祝し申しませうと手輕に御挨拶とするは仕たもの、サア此處が轍鼻揮のびてあり處と筆と執ては見たが越中禪はイッラビても堅く締らずお負に腹の中は空ゝ寂く

で倒さ振ても無い智恵は出ず出るものは鼻から提燈ハテ困った事
 だと思案投首うち蒸れて考ふる事凡そ三時三十三分三秒間ばかり忽
 ち以爲らく侍て暫し待て暫し元來祝詞なる者は大抵極り切たるもの
 にして縦ひ千ペーシの紙に理屈と書立たにせよ朝ら晩まで筆の先
 で饒舌るにせよ之と煎じ詰て見れば僅るに目出度と云ふ三字の意に
 外ならず殊に是ら生れやうとする未知的例へば其生るゝ子が果し
 て男子なるる或ひは女子なるる又その子は果して業平の如き怪面
 の如き將た小町然たるるか多福乎たるるか不具者の満足な者るとも
 見届けずして彼の人の子なら定めし立派だらう業平見たやうだらう
 とマラウの想像に手前勘と調合して無暗にお目出度くと云ふは世
 間普通の祝辭ながら能く考へて見れば實は可笑なるものあり況ん
 や立派な男子が生れるだらうと思ひの外か多福が飛出し堂々たる民
 権家なるべしと思ひの外金のためには俄らに官權主義と化け變る如

き事世間に往々あるに於ておや道人は生得道從輕薄と云つて人とお
 ヒヤラカス事の大嫌ひな男なり故に道人の祝詞は唯お目出度と申す
 のみ餘は能く實物と見届て後に申し上んと欲す諸君幸ひに澁ッ面と
 爲す勿れ呵々

○一寸取歌記

此頃フトした出來心より芳原へ飛込でスッチヤンくの大騒ぎ程よ
 く切あけ寐ねもすみ翌朝の勘定となると囊中無一物よつて將に行燈
 部屋へ籠城せんとの大事件に至りしが漸々馬とつれて歸る事になり
 しゆゑ近所の淨瑠璃の師匠の家へ行き鼻紙の切ッ端へ
 才覺にチト三味線の駒ッたり胴のお金とあしてくれく
 と書て出すと師匠は澁ッ面として其返歌に
 胴ぞして金と櫛なと言ひ込むはよつばと腹が太棹の奴

と書て出せしゆる僕も負惜みに此様な事と怒鳴て返しましたエヘン
太棹の櫓は否ぢやと云ふ人ありん胴とは我も猫皮す

○狂句會席上の張出し

或日骨皮道人の家で柳風方くらべと云ふ狂句の笑集會と催ふし
たる時道人が口に代て席上へ張出たる出放題

口演

今日はお暑さの御厭ひもなく永當く御出席下され有がたく存じ奉
り候

○暑さも知らず風流の狂句連

然る處拙宅は無入なり且つ主人はチト氣の利ぬ男ゆる別段何もお構
ひ申さず候間此段豫て御笑知のはど相願ひ候

○無智無藝我も社會の居候

尤も裸体肌脱寝轉び胡坐と組等は御随意の事

○其元は釋迦も孔子も丸はだる

併し番茶位は差出し候に付各自適宜に御飲用成さるべく候

○濫い顔するな番茶も輸出品

拙宅には煙草益少々不足致し候ゆる其代りマツチと澤山に差出し置
き申し候

○圓滑な會に四角なマツチ箱

酒の飲度れ方は何方へなりとも御出掛の上御自分の錢でイッラでも
勝手に御めしあがり成さるべく候

○わが錢で飲は是こそ自酒自遊

下戸の御方は當所にて名物の桃太郎團子もツイ近所に御坐候間御遠
慮なく御パン付成さるべく候

○一ツ下さいお供いたさう桃太郎

拙宅には一人の借金玉子これあり候ゆる諸君の御手許へ参り悪戯とするものも知れず候に付アブナイ小刃錐の類又は御大切の品々は御用心下され度候

○子と持ぬ人も察せよ親ごゝろ

イヤ雑談は扱置て何分にも此會の盛んになるやう御助力の程願ひ奉り候

○力くらべに借りたきは只一臂

○智恵野振作初て女郎買に行と送るの序

智恵野振作君よ、君は生意氣にも大膽にも圖々敷もべヲボウ臭くも、今日今夜の只今道樂者の仲間入と爲し、母親の臍線金と胡魔化し出して將に極樂浄土の吉原に飛込み素尻多女郎に鼻毛と伸し目尻と垂れんとす、骨皮道人極内々に其袂と撃き之に差出口として曰く、振作君よ君

は元來石部主義の屁痴堅き性質もゑ未だ臍の尾と切て以來一足も吉原の土と踏す、未だ一眼も女郎の烟草と吸さるは改めて御聞申さずも知れて居るなり、果して吉原の土と踏す女郎の烟草と吸た事なければ、女郎買の事につき万事不案内諸事、娯笑痴なさは是れ又た君が心底と聞ずして明々瞭々閻魔大王が照魔鏡と以て亡者の腹の中と見るが如きなり、而して道人の察する如く諸事不案内万事娯笑痴なくして浮々彼の地に飛込めば、畜に膽玉と潰し大耻と搔のみならず磁石の鉄と吸取ると一般十圓ある者は十圓五圓ある者は五圓、悉皆吸ひ取られて安戯樂閑となるは是れ當り前の事にして、昔し紺屋の職人某が十兩の金と持て行て高尾と買ひ以て三ヶ年間念ひに思ひ戀れた本望と遂るのみならず、却つて高尾の爲に見込れて思ひ掛なき夫婦となるが如き馬鹿正直者は當節は藥に仕度も之れなきなり、故に道人は君が大切の臍線金と吸ひ取られて安戯樂閑となると憐み荒増し其譯柄と説き聞さ

んと欲す、振作君よ請ふ耳の糞とホチクリ出して之と聞け、夫れ吉原は日本國中第一等の遊廓にして女郎屋も澤山あり女郎も亦た夥多し、而して其女郎屋には大店あり中店あり小店あり通人は之と稱して大籠中籠小格子と云ふ而してチヨン／＼格子と云ふも小店の一名なり、又た其の女郎には頗る付の別嬪もありお茶ッ非もあり素尻多もありお多福もあり出ッ齒もあり獅子ッ鼻もあり其面付種々様々にして恰も一山百文の玩弄物の如し、亦た大層なる場所ならずや、夫は扱置き先づ大門と排入ば兩側に引手茶屋と名くる者あり、此引手茶屋に入るは大籠又は中籠に遊ばんと欲する大盡株の客にして君が如き素寒貧の行べき處にあらす、且つ大籠や中籠は迎も君達が遊ぶ所にあらざれば姑く措て語らず、今君達が遊ぶべき所と指定すれば先づ京町の將九角町川岸の小格子あるべし、然れども此小格子の人と欺むき人と胡魔化し人と馬鹿にしてペラと吸取るは却ッて大籠中籠の上に出づ、是と以

てその遊び方に慣すその危則と知らざれば素敵滅法界目の練玉の飛出るほどの災難に逢ふ事往々にして之れあり注意せざるべけんや、去り乍ら手輕に遊び安直に愉快と爲そは小格子と措ては外に之れなるべし、依て道人は小格子の遊び方および危則と誤傳授申さんと欲するなり、振作君よ再び耳糞とホチクリツて之と聽け、扱京町角町の小格子の前に人の袂と引張て頻りに登樓と勸むる者あり曰く、お手輕に如何様ですエへ、、、、、決して多分の御散財はあけませんエへ、、、、斯様に花魁も並んで居りますすへい／＼皆お部屋が明て居りますすへい／＼如何様ですエへ、、、、と、幾度の一ツ言と繰り返し上邊に愛嬌と飾り内心にペラと狙ひ、獨りで饒舌ッて獨りで返答す、これと立番又た妓夫と云ふこの立番の言ふ所は決して當に成らず所謂の出鱈目出放題のみ、君其言と信じて叨りに飛込む勿れ、是れ用心すべきの第一なり、又初めに安直手輕の約束と爲し樓に登ッて後無暗に洒肴と勸め、詠

らへずして肴と運び命せすして酒至り、人としてハヲホウに酔はしめ
 而して翌朝となつて勘定書と見れば其の高は約束の五六層倍に出づ、
 粹子は之と稱してホリ店と云ふ、蓋しホリとは暴利の謂、田舎漢或ひ
 は未だ登樓に慣れざる者往々にして此暴利を食ひ小馬鹿にせらるゝ
 事あり、是れ用心すべきの第二なり、又た格子の前に立ち敵娼と撰扱す
 るに當り小町揚貴妃の美婦と認めて之を買ふべき約束を爲し、引付け
 已に終り坐傍に来るとき能く其面と観れば痘痕の凸凹或ひは皺
 苦茶の婆アなる事あり、是れ用心すべきの第三なり、又た二階へ上つて
 後鼻毛と伸して涎と垂し目尻と下げ現と扱せば敵娼は早くも其の野
 呂的なるを見抜て、ソレ樓母さんに十錢遣て下さいヤレ若い衆に若干
 遣て下さい杯と云ひ、或ひはれ鮮とお取り成さい或ひは菓子とおたべ
 なさい杯と、色々の辨茶羅と以て財布の底と叩あしめんと欲す、ソコで
 其云ひなり次第に之を爲せば却つて野呂間と笑はれ頼魔と嘲けらる、

故に初會より大盡と氣取て財布の底と叩く者は、恰も河童に向つて
 尻と出すに異ならず、是れ用心すべきの第四なり、又た敵娼が手取る
 ときは難と云ひ艱と云ひ翌朝去るに臨んで居續けと勤むる事あり、然
 れども初會より流連と爲すは野暮の極點にして恰も鼻下長の金看
 板と出すに異ならず、是れ用心すべき第五なり、其他用心すべき事誤傳授
 申すべき事は澤山にありと雖も、之と悉く申し述るも逆も記憶は出来
 ざるべし、故に一と以て十と推し今夜實驗の上合點の參らぬ事あらば、
 明日道人に就て之を聞たまへ道人は其答辨と吝まざるなり、逝や扱作
 君決して甚的と起して廓下鳶となる勿れ、

○智恵野扱作の答書

智恵野扱作謹み再拜聊の御禮の爲め、鉄針の文字と並べて骨皮道人先
 生様の下駄の下に奉呈と、御目元は御面倒様ながら一應御覽と請ふ扱

て振作儀この頃ガラにない飛でもない不了簡と引起し、ホンの僅はりの臍線錢と以て吉原に飛出すに當り道人極内証で廊中の危則及び用心をべき五ヶ條の懇諭と辱なふす、振作は素より不粹的なれば未だ芳原の様子如何と知らず況んや女郎屋の危則とや是と以て道人の娛親切と一層有難くおもひ傍聴筆記法に倣ふて悉皆其言と手帳に詳記し胸間に記憶し、俄に通人粹子と氣取て我家と飛出し道すがら窺ふに以爲らく骨皮道人は評判の法螺吹なり我れ初めて芳原に遊ぶに因て例の法螺と吹き我として膽玉と潰さしむる者なりと、既にして其實際に臨み道人の言の必らずしも法螺ならざるを知るなり、何によつて之と知る、曰く耻と外聞と言はざれば事と仔細とは明瞭し難し、故に振作恥と外聞とを忍び我が失策と陳述し以て道人の言の必らずしも法螺ならざると再び馬鹿な不了簡と引起すべからざると明らにせんと欲す、骨皮道人先生様よ暫時退屈と忍んで失策の次第とお聞下さる

べし彼の夜道人と袂と分ち直に日本橋通りに出て將に北方に向はんとするとき若手の車夫あり僕に勸めて曰く、旦那私しは淺草まで歸るのですが如何で極お安く参りますと、僕その車と見るに黒塗金紋に非すと雖も亦た相應の人車且つ挽夫も亦た二王然たる若者なり、依て其勸めに應じて曰く、芳原までイクラだ、車夫曰く二十錢で参りませう、僕曰く高い、其様な高い車賃があるもの、車夫曰く夫ぢやア如何程やつて下さいませう、僕曰く十錢位なら乗て行ても宜、車夫曰く宜しう御坐います、参りませうと、乃ち人車と挽き來り振作と乘しむ、振作これに乗り車夫これと挽き、ゴンサイの掛聲と發し、運轉自在左より來る者は之と右に避け右より來る者は之と左に避け、鉄道馬車も屁とも思はず況んや乗合馬車とや、車の勢ひは飛が如く本町より馬喰町に移り將に淺草橋と渡らんとす、此時車夫車と停て曰く、旦那骨と折て参ります、すのら貳十錢奢ッて下さいと、僕曰く十錢の増金は少しく過料なり、

然れども車行の迅速なるを以て五錢を増すべしと、車夫澁々諾して又走る。走って淺草藏前より路を左方に取り往來の人稀なる處に至り、徐々車と引ながら曰く、旦那二十錢奢って下さるゝ左もなけりやア此處で御免と蒙りますと、僕以爲らく若し此處に置き去りと喰は、奈何ともすべのらず寧ろ五錢を増して威勢よく行に如すと乃ち彼が請ふ所に任す、是に於て車夫は一層の速力を加へ、縦横曲折廣街狹路差はず迷はず疾馳する數町、淺草田圃より土手に登り將に大門に入んとす、車夫曰くお茶屋は何處です、僕曰く我れ之と友人骨皮道人なる者に聞く、お茶屋は我々素寒貧の行べき處に非すと、故にこの大門で宜しいと車と下って車代二十錢と出す、車夫これと受す奮然として曰く、旦那御常談と仰しやツちやア困りなすお約束の賃錢は三十五錢です、夫と只た二十錢で胡魔化さうたア餘りひどいぢやアありません、僕曰く是と怪ある事と云ふマア能く聞が宜先づ初めに十錢の約束として夫より淺

草橋で五錢増して夫で十五錢になつて居る夫より其次に貴様が二十錢にして呉ると云ふのら承知して其約束の通り二十錢と遣たんだのら何も不足と云ふ處はないぢやない、車夫曰くナ、再ぢやアありません、初め十錢の處へ五錢増て戴いたのら十五錢になつて其次に二十錢下さいと云つたら旦那が宜しいと仰しやツちやアありません、お夫だのら十五錢に二十錢で都合三十五錢でさアねト、僕これと聞き其合計二十錢と十五錢の上へ更に二十錢と増との間違ひなるを知り之と辨明せんと欲すと雖も何に致せ彼れは豪邁の壯夫にして動もすれば腕力に訴へんとするの様子、殊に往來の人足と停めてツイく、掻き立てるにより些細の金錢の爲に口論と爲し若し又た怪我でもしては馬鹿く敷事と思ひ、其言に任せて三十五錢と出し、車夫に渡せば車夫は之と腹掛に収め舌と出して嗤ひながら去る、此れ第一の失策なり、夫より大門と入れば兩側の行燈は白晝と欺むき三味線太鼓の聲はドン

くチンくスチャラカチャラくと響いて耳殆んど聳とならんとす此れ石部學者の所謂る天下の樂國人間の柔脚風景温軟魂飛び神迷ふの地、扱作初めて其言の誣さると知り且つ其景況の豫想外に出しに驚き真個に魂飛神迷ふの時テンくドンくテンドバくくとお祭り一般の太鼓と叩き且つ三味線と弾て無數の踊り屋臺のあると見る、依て之と見物人に聞ば則ち曰く是れ有名の仁和賀踊りなりと僕もた其の素敵滅法界に盛んなるに驚きながら踊り屋臺の横手に至り之と見れば其の手踊りの巧みなるは彼の乞食坊主がカツボレと躍るの比にわらず、僕大ぬに感じ見物する數刻一幕已に終つて將に其場と去らんとする時腰の廻り軽さと覺へ探つて見れば大切の煙草入チヨキンと食ひ俄に狼狽するも其踪跡と尋ぬるも一の手掛なし此れ第二の失策なり、夫より仁和賀の見物と止め行く數歩にして左坊に折れば巨大の妓樓あり、僕以爲らく古人云へるあり犬とならば寧ろ豪家の犬と

爲れと、我も亦た客と爲らば寧ろ大樓の客となるに如すと獨り語り獨り答へ意と此に決して圖々しく飛込むこの時若い者兩三人細聲に入らッしやいと唱へて丁寧に出迎へ、僕と立派な十疊の座敷に誘ひ頗る懇慫に兩手と突て曰く、エ、願とお見それ申しまして恐れ入りますがお茶屋は何方がお馴染で入らッしやいます、僕曰く余は今夜初めて此地に來りし者なれば勿論馴染の茶屋なぞは無し、然れども僕として安直手輕に愉快と盡さしめば何ぞ茶屋に掛り合ふの面倒と要せんや而して此樓は娼妓の揚代が何程で且つ何程の酒肴料あれば一夜の快樂と盡すと得べきや、若い者頭と搔ながら曰く、へい、先づ花魁が一圓で跡の御酒肴料は旦那様の思召し次第で御座います、と僕これと聞き以爲らく揚代に一圓と奪はれ隨つて相應の酒肴料と出さば中々以て手輕にわらず、此奴ア一番にげ出すに如じと終に遁辭と設けて此樓と駈出す、駈出すに及んで若い者兩三人手に鹽と握り後

よりハラ／＼と僕に振り掛ながら来る、僕盪といたゞき鹽々然として此樓と出づ是れ第三の失策なり、是れより復た茶屋のある町に出で思ふに仲の町なるべし行こと數歩にして左右と眺むれば闇燈明々として妓樓數十軒あり来る者往者老若山と爲す是れ道人の所謂る京町と云ふ所なるの、僕また其處に無亂つさ格子の内と道人の言の如く素尻多ありお多福あり出ッ齒あり獅子ッ鼻あり屑澤山にして別嬪らしい代物は一人も無し依て轉じて某樓の前に立つ時に若い者二人あり僕の袖と引て御安直に如何様／＼と登樓と勸む、僕曰く一夜の愉快凡そ幾千金と要するや、若い者曰くへい／＼揚代が二十五錢に臺が肴の臺と云ふ略語二十五錢御酒と二本と致しまして十二錢五厘小物代（蠟燭その他の諸費）が五錢で都合六十七錢五厘より外に御散財は掛ませんと僕その男の面付と見れば正直なる者の如し、依て一人の別嬪と撰振して此樓に登る樓に登ッて引付と爲し轉じて六疊の坐敷に通り間も

なく肴の臺と酒と運び来る僕これと飲み之と食ひ献酬數刻酒盡き肴空しくなりし頃又た素敵滅法界の臺酒と運び來たる、僕大に怪み敵娼に問て曰く今運ぶ所の臺酒も亦た約束の部分なるの敵娼は知りまへんと、又た若い者と呼で之と問ふ、若い者曰くへい／＼何云ふお約束で御坐いましたる少しも存じませんと、僕これと聞て益々怪み以爲らく、是れ道人の謂れたるホリ店なるべし此くの如き處に長居とせば如何なる悪計に逢も亦た量り難し、如す轉ばぬ先に杖と突にはと、乃ち若い者に命じて勘定書と作らしむ、其勘定書の至るに及んで之と見るに早や已に一圓五十錢餘なり、僕據るなく之と拂ひ忽々にして出で去る是れ第四の失策なり、僕已に四ツの失策に逢ひ迎も我々不粹的行べのらず遊ぶべのらざる場所なる悟り益槍然として大門と出で復た十錢と奢ッて人車に乗り我家に歸り來れば親父猶未だ寢ず、突然怒雷的の大聲と發して曰く、この馬鹿野郎この夜更まで何處とホツキ歩

いて居たのだ間拔めがと、一本食ッて説明に言葉なく悄悄として寝に
 就く是れ第五の失策なり、拔作の失策大略斯の如し嗚呼、芳原は恐るべ
 き處なる哉否な芳原の恐るべきに非ず其法を知らず其事に慣ずして
 生意氣の振舞を爲せしは我が過ちなり、書して以て後來の戒めと爲し
 併せて骨皮道人先生様の言必らずしも法螺ならざるを保証すと云ふ、
 智恵野拔作願首く、

○狂歌

●題 食客門前の雪と掻く

- 碁で庭掃にあらねど、入り人天窓と共に、おのゆき掻
- 門の雪のさつ、小言夕ぐれや、いつまで此處に居候して
- やむ雪に止むと得ぬのは、居候夕べの門と、まご月に掃く
- 居候なまけた罰がつもり、來てお邊の雪と、おくの仕合

○門前で雪のさながら居候まだ辛抱の出来ぬ鼻うた

●題 猫の戀

- 瘦るはど盛ふとらせて、浮れ猫忍びおへしと、忍ぶおぼる夜
 - おたのしみなせ、二疋が戀なると、當こすらずに鼻こする猫
 - 戀に身は浮れ、夜すがら家根づたひれのれと、聲とゝゝらす猫のな
 - 戀すてふ牡猫のこゑの、夜嵐に雜りて、すこく聞へけるおな
 - 淡雪の解け、往く庭に逢ふ猫の跡に、散せし梅の花がた
- 題 釋迦の誕生
- 甘茶にておつばれ踊るふり、見れば生れながらのおどけ釋尊
 - 猫の子も今日は、釋子の誕生と、ぺんく草と摘に、おくらん
 - しやく尊と内の弱つた、冷汗はわきの下から、誕生とする
 - 灌漑のあま茶にならずした、鼓打合せてぞ踊るカッポレ
 - 花見堂和尚に、甘茶わらさせてお釋迦の團子、こねる大黒

● 題 春遊膝栗毛

○ 野遊びに猫と鯨のいちや栗毛伴の幫間は彌次喜多と真似
 ○ 野あそびに彌次馬連と北八はあとり走りつくしはんばう
 ○ 青柳に鞭とうたれて彌次馬が飛だ羽根たに春の乗さり
 ○ 酒とつけ花と脊負て春の野に道くざと食ふ膝栗毛のな
 ○ 豆とさへ食ひ飽たのる膝栗毛春の日ながに跳あるく野邊

● 題 お三の居隠り

○ 坐睡て居れば旦那に叱られるハテ儘ならぬお清なりけり
 ○ 家内みな尻に帆おけて芝居行き留主居の下女は一人船こぐ
 ○ 炊ぎ女は盧生が夢や見るならん飯の焦るも知らで居ねふり
 ○ 留主番と任されて氣は針の目のおちても横にならぬ炊き女
 ○ 尺度のさは突張てこぐふねに壘の海に下女の居ねふり

● 題 稻荷祭の強飯

○ 祭る日とるねて集る懇會に稻荷山は盛た強めし
 ○ 初午に招られて下戸腹つゝみドマンが鈍と食ふ強めし
 ○ 初午の幟りのさとの長屋中地守の稻荷配る強めし
 ○ 祈るなる己がこゝろの正一位赤き眞味と見する強めし
 ○ 初午の赤飯が咽にはさまりて狐のやうに咳あこんく

● 題 男女混じて追羽と撞

○ 番頭や小僧お三のかひ羽根は一イニウ三世の春のたわむれ
 ○ 浮れ男とうるれ乙女の追羽は往來の人の尻もたゝるん
 ○ 墨ぬつた男のあはの黒ければいとゝ女の白さかひ羽根
 ○ 打ちまぢり門邊に競ふ追羽根につくくと知る男女同權
 ○ 撞ばねの負よりつける皆の顔墨ぞつもりて斑となりぬる

● 題 幽碎いても飲れざりけり

○ 白骨と間違へて喰ふ彌次郎兵衛幽くだいても飲れざりけり

○金釘や干たひじきの行列は喰くだいても飲れざりけり
 ○願おけて一生食へぬ断物はのみくだいても飲れざりけり
 ○朽おちる虫歯ののけと我知らず喰くだいても飲れざりけり
 ○玉と譽め黄金とはむる言の葉のみくだいても飲れざりけり

○吉原の不景氣と詠す

嗚呼不景氣よ不景氣よ
 客人次第に減り行きて
 くるわは丸で闇同やう
 はした女郎が巾さのせ
 絶る間のなきいろ騒ぎ
 むのしの姿は更になく
 移り更りの當てにした

お前が入りし其の後は
 軒ぢやうちんも光なく
 安らざれば買人なく
 入り込む客はくまや入
 品格しだいに下落して
 冬は來れども錢出來ず
 客人たちはおとづれず

湯水の如くせにのねと
 何れの時にあるやらん
 嗚呼吉原とすくはんと
 數十まんのだいさんと
 仲の町なる茶屋くくと
 客ひくための燈ろうも
 仁和賀の仕組も彼是と
 つらく思ひ廻らせば
 そろ盤玉にあはずして
 古來しやうぎと傾城と
 國とうしなふ者もあり
 身とあやまるは此道ぞ
 成べく事なら廢すべし

遣ッてすつる馬鹿者は
 待遠しさのいたりなり
 家とつふして奮ばつし
 ぶち散者はあらざるの
 この不景氣は大こまり
 思ひし様には味入なく
 故障のみにて引たゝす
 世に不都合のこの稼業
 つぶれ方が増しなるぞ
 呼ぶ例へさへある如く
 わる者たちが中途にて
 國の爲めまた人の爲め
 成べく事なら廢すべし

○ 數へ歌つつつくつ盡しの替歌

- 一ツ 人も知りたる新橋のステーション、ヒーの合圖で蒸氣車が飛
が如くに走りつく開化の御代の嬉しさは瞬く間に神奈川や横濱
さしてつつつくつ
- 二ツ 二人びき車の上よは猫と鬚日曜どんたく托附けにお茶屋と
さして急ぎゆく夫あら何だと問ふたれば何やらつくつくつ
- 三ツ 港場で大砲ヅドンに笛がなるアノ音なんだと問ふたれば蒸
氣船がつくつくつ
- 四ツ 四ツ辻で黒いシャツポにサアベル角な提燈手にさげてキヨ
ロく眼でやつて来るアノ人なんだと問ふたれば泥坊のあとと
つつつくつ

- 五ツ 田舎でも遠き山家の里までも小學校と設けられ蒙さかのこ
も自らの開化の峠につつくつ
- 六ツ 麥わらのシャツポと冠ツた書生さん西洋ブツは見へば
り錢ある其時や飛だして牛店で箸もちつつつくつ
- 七ツ なりたての鱧さん俄に鬚のばし高帽ステッキゴムの靴相乗
車の真似として夫あら何だと問ふたれば女猫の尻尾につつく
つ
- 八ツ 闇の夜に道のはとりや軒の下婆さんウロく立て居る通り
のりし熊と八婆さん見るより馳よつてお遊びなさいと袖と引
く其のまね何だと問ふたれば引張りつくつくつ
- 九ツ 今春の藝妓外面は活辨天歌舞の菩薩の花の顔口の車おのせ
あけて三筋の糸へひきよせるお客はどうだと問ふたれば涎が膝
につつくつ

○十で 通り町瓦斯の燈火の、やきて光りまばゆきその中に軒とな
らべし新聞屋開化のしるべ文明の魁けなんぞと云ふ癖に空も隨
分つつつくつ

○某少年の放蕩と戒む

人誰の情慾無あらんや、人にして若し情慾無ければ木石と一般のみ、造
物者の罪人のみ、黄鳥の、々々耦と逐て春花梢頭に轉ずるは是れ情慾あ
ればなり、麋鹿の吻々配と覓めて紅葉樹下に鳴くは是れ情慾あればな
り、禽獸にして猶ほ此の如し況んや人とや、人にして情慾なき者は道人
は唯武藏坊辨慶と小野の小町と聞のみにして其他は未だ曾て之と
聞ざるなり、川柳子曰く辨慶と小町は馬鹿なア隙アと穿てる哉此言
や道人も亦た辨慶と小町と以て馬鹿の隊長造物者の罪人と爲さん
のみ、然りと雖も人情慾あるに任せて之と濫用すれば才子も馬鹿と爲

り學者も凡夫と爲る是の故に古聖の色と戒むるや懇々切々なり、或人
曰く古聖切に色と戒むれば之と守るの辨慶や小町は其行ひ聖人に近
きのと、是れ大間違ひの甚だしき者と謂ふべし、何となれば古聖は唯色
と戒むるのみにして敢て色慾と禁止するの主義には非ず、即ち堯舜も
孔子も各々子あると以ても知るべきなり、故に道人が茲に屁理屈と
擔ぎ出すも亦た禁止主義には非ず、唯其沉溺と責め其節欲と願ふのみ、
例へば酒と飲ざるも無意氣なりト云つて又圖部八に酔ッ拂ふも困り
物なり、古聖亦た言へるあり、唯酒は量り無し亂に及ばすと、色に於るも
亦然り、辨慶小町の如きも餘り偏屈なり、唐丹時次の如きも餘り過色な
り、故に偏せず過せず、其中央と取て初めて十人並の人と謂ふべきなり、
世間己に節酒會の設けあると聞く何ぞ節色會と設けざるや、世間節色
會と企てる者のあるまでは各人自ら色と節するの外なきなり、道人此
頃之と知己の話しに聞く、足下近來情慾と濫用し某娼妓に誤夢中なり

と、夫れ娼妓なる者の家業は人々が情慾と縦まゝにするの所なり、然れば之と買ふ者は情慾と縦まゝにするに在り、矧んや甘言佞媚外面如菩薩の手管と以てすれば、木石ならぬ人間にして誰の魂飛び神迷はざらんや、其の魂飛び神迷ふ者は娼妓の手練手管の出ると知らずして、彼れの我に眷々たり、彼は我に戀々たりと、自惚の上、自惚の上塗と爲し、雨の降る夜も厭はず、風の吹日も嫌はず、光氏其人と氣取て以て、彼れの穿に掛る是れ尋常普通の鼻下長なり、道人聞く、足下近頃の誤夢中は己にこの鼻下長連の仲間入と爲すと、嗚呼、惜いゝな、足下の敏才にして、僅に賤娼妓の爲に、其魂ひと奪はれ、其神と迷はさる甚だしきに至つては、數日留連して、珍々嶋々の小鍋立に洒落込むと、何ぞ不了簡の骨頂なるや、古人狂歌あり曰く、上は晝中は夜ゆき、下は泊る下々の下等が居續けとする、と道人實際に於て之と知る居續けは實に不稔の極なると依て、是より道人が娼妓に沈溺するの不可と述べ、以て足下に告んと欲す、足下

願はくは聽一聽せよ、某あり一娼婦と愛し、雨夜も必らず訪ひ、風雷も必らず至り、又常に留連と爲し、一月中の二十日は、恰も女郎屋に寄留するが如し、是と以て娼婦も亦た頗る漆膠の情あり、後朝に歸らんと欲すれば、娼妓留めて曰く、夜間も雜沓して、熟話の期なし、冀くは一日郎が身体と妾に借よと、黄昏に及んで去らんと欲すれば、娼妓留めて曰く、人樓に登るの時にして、樓と下るは甚だ不祥なれば、冀くは最一夜郎の身体と妾に借せよと、緘手袖と率て恨みと訴たへ、艶顔涙と合んで、痴と説く、此場合に當つて誰の腸と斷ざらん、況んや鼻下長その人に於てとや、又況んや留七去三の意あるに於てとや、某以爲らく是れ鴛鴦の化生ならざれば、比翼の再來なりと、某自ら鴛鴦に比し、比翼に擬す、鼻下の長さ知るべきなり、縦ひ炮烙の刑と作るに至らざるも、娼の云ふ所は皆従ふ、娼曰く、更衣の期近きに逼り、衆妓已に新装の備へあり、而して妾獨り無し、某曰く、萬般我が胸中に在り、決して心配と爲す勿れと、娼曰く、屈指すれ

ば神祭已に目前に在り仲どんに櫻母さんに浴衣と與へざれば妾が肩身甚だ狭し某曰く我れ應に之と辨すべし決して心配と爲す勿れと婿曰く某日は此櫻の煤掃なれば手拭と半天とと製せざれば面目なし某曰く我れ應に之と補なふべし決して心配と爲す勿れと婿曰く實父不幸にして病いと得て葦床に在り然れども家業より貧なれば良薬と與へんと欲するも價金なく之と與へざれば其命危し某曰く我れ應に之と救ふべし決して心配とする勿れと百事唯々万般諾々その言ふ所大となく小となく悉く其需めに應じ其費やす所幾許金なると知らず而して婿の之に報ゆるは唯深交結るに二三個の菓子と持參すると一杯の酒一皿の肴を運び來る位のみ且つ曰く甲客と欺むひて之と奪ふ是れ情郎に與へんと欲するの衷情のみ或ひは乙夫と詐つて之と奪ふ是れ郎君に與へんと欲するの微意のみと某以爲らく酒菓の旨きに非ず美人の貽ものなればなりと殊に知らず其酒菓は何人の半嚙り半飲の

殘物なると然り而して某は此の魔物に魅せられ内と外にし外と内にし我業と業とせざるを以て冠烟日々に瘦せ亦た昔日の比に非ず某終に大ぬに窮し如何ともすべからず依て行て之と婿婦に計る然れども婿婦は元と金貸商賣にあらず妓櫻は教育所に非ざれば何ぞ相談相手となるの道理あらんや唯曰くお氣の毒様お氣の毒様と且つ暗に敬して遠ざけんと欲する者の如し是に於ては某初めて知る纏綿我と慕ふの情は我にわらずして紙幣に在りしと嗚呼薄情なる哉彼の婿婦と俄に悔と生と急に四角張も所謂六日の菖蒲十日の薊火事跡の唧筒屁と放て尻と閉めると一般縦ひ千悔万悟するも將た復た奚ぞ及ばんや婿婦お沈溺し鼻下と伸長する者概ね此の如くならざるは無し戒しめざるべけんや夫れ足下は金満家の娛令息なり生來英敏のお方なり金あり才あり所謂の鬼に鉄棒の御人なり然れども金あり才あると頼んで鼻下と伸長し婿婦に沈溺すれば一身と誤るも亦た知るべからず縦

ひ一身と誤らざるも少年は一生の春時今にして勉強と爲さざれば何れの時よ是れ爲さん、矧んや國會の開設も已に數日の眼前に迫れり、豈に徒らに都々一と謠ひ藤八拳と闘はして、ホ、ンに観遊するの時ならんや、是れ道人が足下の爲めに深く心配する處なり、斯く説き來らば足下或ひは將に云はんとす、此の如き屁理屈論は百も承知二百も合點なり、君餘計な世話と焼て人の血氣と頭痛に病よりは宜しく我頭、の蠅と逐ふべしと、夫れ然り豈に夫れ然らんや、聞く足下の愛婦は頗る別嬪にして且つ手練手管に長すと、果して然らば足下が何程憤鼻揮と堅くめて掛るも到底その術中に陥るや、寫眞に取て見るが如し、道人猶ほ一夕話と以て之と例せん、昔し一獵夫あり、狸々々捕へんと欲す、然れども狸々は素より敏慧のものなれば、獵夫は殆んど捕策に窮す、然るに一日其策の胸間に浮ぶあり酒と酒壺に盛りて之と海濱に置く、蓋し狸々は酒と好めばなり、既にして狸々來り之と見て以爲らく是れ必ら

ずや我と捕ふるの策なるべし、容易に近づくべからずと、然れども性酒と好むの故と以て其傍らと去る能はず、況んや酒氣紛々として鼻頭と穿つに於てとや、狸々又た以爲らく近所に人なし聊の一杯と喫するも何ぞ妨げんと、乃ち酒壺に臨んで一杯と喫す、其味ひ甘美又た以爲らく人未だ來らず猶ほ一杯と喫するも何ぞ妨げんと、乃ち之と喫す、其味ひ言ふべからず、喫了つて人未だ來らず、又以爲らく猶ほ一杯と喫するも何ぞ妨げんと、二杯三杯終に一酒壺と盡し、眼臉紅と帯ひ酔歩踉蹌忽ち狸三化七と爲り興に乗じて且つ踊り且つ舞ひ終に酒壺と枕にして臥す、時に獵夫其虛に乗じて馳せ來り之と捕ふと云ふ、此言俗話に似たりと雖も亦た以て諷針と爲すに足れり、糞はくは足下猛省する所あれ、

笑滑稽玉手箱終

明治二十三年十一月六日印刷
同
年十一月十五日出版

版權所有

著者 西森武城

發行者 井上勝五郎

印刷者 三好守雄

淺草區御藏前片町二十番地

京橋區南紺屋町一番地

淺草區左衛門町一番地

